

聯号考古隊、「甘肅礼県大堡子山秦墓及附葬車馬坑発掘簡報」(『文物』2018年第1期、図二)。

- 第3図 大堡子山遺跡 中央立看板・M3号墓発掘地点、後方草地・M2号墓発掘地点痕、右後方ドーム・祭祀坑K5：筆写写真、2017年。
- 第4図 秦公鼎 上海博物館蔵：筆写写真。
- 第5図 秦公簋 上海博物館蔵：筆写写真。
- 第6図 秦公鼎・簋銘文 1. 秦公鼎、2. 秦公簋甲、3. 秦公簋乙、上海博物館蔵：礼県博物館・礼県秦西垂文化研究会、2004、『秦西垂陵区』(文物出版社)。
- 第7図 大堡子山K5祭祀坑発掘地点：筆写写真、2017年。
- 第8図 青銅罍 大堡子山K5祭祀坑 1. K5：1-1(秦子罍)：国家文物局、2015、『秦韵……大堡子山出土文物精華』(文物出版社)。2. K5：3-1・3. K5：5-1：筆写写真。
- 第9図 秦子罍銘文 礼県博物館：筆写写真。
- 第10図 秦公罍 宝鷄市楊家溝太公廟村 1. 2号罍、2. 3号罍：筆写写真。
- 第11図 1号秦公罍銘文：中国社会科学院考古研究所、2001、『殷周金文集成积文』第一卷(香港中文大学出版社)。
- 第12図 秦公1号墓 陕西省鳳翔県：筆写写真、2003年。
- 第13図 石磬・銘文 秦公1号墓出土：宝鷄先秦陵园博物館、『雍城秦公一号大墓』(作家出版社)。楊曙明、2015、『雍秦文化』(中国文史出版社)。
- 第14図 14号秦公陵园M45号墓、橐泉宮瓦當：陕西省考古研究院・鳳翔県博物館、2015、「雍城十四号秦公陵园鉆探簡報」(『考古与文物』2015年第4期)。
- 第15図 周文王陵(左前)、周武王陵(右後方)：筆写写真、2005年。
- 第16図 東陵 1号陵园付近：筆写写真、2017年。

期には亜字型墓が出現する。春秋時代の秦墓墓上には墳丘は無く、春秋時代中後期の秦墓墓室上には墓上建築が造営されているが、戦国時代秦墓墓室の上に方形の墳丘が出現する。春秋時代雍城の穆公陵と景公陵の墓上に大型建築が存在していたことに間違いは無い。惠文王公陵・武王永陵の方錐台形墳丘が始皇陵に繋がり、穆公陵や景公陵の墓上建築の伝統が、始皇陵北側の寝殿建築に繋がったと推定される。

註

- (1) 礼県博物館・礼県秦西垂文化研究会、2004、『秦西垂陵区』（文物出版社）。早期秦文化聯号考古隊、2008、「2006年甘肅礼県大堡子山祭祀遺迹発掘簡報」（『文物』2008年第11期）。
- (2) 宝鶏市博物館・盧連成、宝鶏県文化館・楊満倉、1978、「陝西宝鶏県太公廟村發現秦公鐘、秦公罇」（『文物』1978年第11期）。
- (3) 宝鶏先秦陵园博物館、『雍城秦公一号大墓』（作家出版社）。
- (4) 陕西省考古研究院・鳳翔県博物館、2015、「雍城十四号秦公陵园钻探簡報」（『考古与文物』2015年第4期）。
- (5) 楊曙明、2015、『雍秦文化』（中国文史出版社、138～141頁）。
- (6) 劉衛鵬・岳起、2008、「咸陽塬上“秦陵”的發現和確認」（『文物』2008年第4期）。
- (7) 陕西省考古研究院・咸陽市文物考古研究所・周陵文物管理所、2011、「咸陽“周王陵”考古調查、勘探報告」（『考古与文物』2011年第1期）。丁岩、2015、「咸陽原两座秦陵园主人之蠡測」（『考古与文物』2015年第2期）。
- (8) 雲夢睡虎地秦墓編集組、1981、『雲夢睡虎地秦墓』（文物出版社）。
- (9) 焦南峰、2014、「咸陽厳家溝陵园における考古学的発見と探索」（『中華文明の考古学』同成社）。
- (10) 陕西省考古研究所・臨潼県文管会、1987、「秦東陵第一号陵园勘查記」（『考古与文物』1987年第4期）。
- (11) 趙化成、2000、「秦東陵芻議」（『考古与文物』2000年第3期）。

挿図出典目録

- 第1図 大堡子山遺跡遺構分布図：李峰、2011、「礼県出土秦国早期銅器及祭祀遺址論綱」（『文物』2011年第5期、図三）。
- 第2図 秦公大墓 M3・M2号墓、祭祀坑 K5位置図 大堡子山遺跡：秦文化与西戎文化



第 16 図 東陵 1 号陵園付近

襄王。莊襄王享國三年、葬芷陽。

(昭襄王國を享こと五十六年、芷陽に葬る。孝文王を生む。孝文王國を享こと一年、壽陵に葬る。莊襄王を生む。莊襄王國を享こと三年、芷陽に葬る。)

とある。西安市臨潼区韓峪郷の驪山西山麓で、4 個所の陵園が発見され、『史記』蕭相国世家などに見える秦東陵と推定されている。⁽¹⁰⁾ 4 号陵園は、第 28 代昭襄王と唐太后の「芷陵」との推定があり、亜字型大墓に昭襄王が葬られ、甲字型墓に唐太后が葬られていると言い、⁽¹¹⁾ 1 号陵園は 2 基の亜字型大墓で、いずれも低い墳丘が残り、東西長さ約 220m あり、『史記』秦本紀・索隱に言う、

孝文王……即位三日辛丑卒子莊襄王立「索隱」名子楚三十二而立立四年卒葬陽陵。

(孝文王……位に即く。三日辛丑に卒す。子莊襄王立つ。「索隱」名は子楚、三十二而して立つ。立ちて四年卒す、陽陵に葬る。)

の第 30 代莊襄王と帝太后の「陽陵」とも推定されている (第 16 図)。

(4) おわりに

大堡子山 M3 号墓の被葬者は秦襄公、M2 号墓の被葬者は襄公妃である可能性が高い。雍城 14 号秦陵園の M45 号墓の被葬者は秦穆公の可能性が高い。春秋時代の大堡子山大型墓・雍城秦公陵園大型墓と、戦国時代後期の陵園・大型墓を比較すると変化がある。春秋時代の大墓は中字型墓であるが、戦国時代後



第 15 図 周文王陵（左前）、周武王陵（右後方）

秦恵文武昭厳襄五王、皆大作丘隴、多基^{えいぞう}瘞藏。咸盡発掘暴露甚足悲也。

（秦恵文・武・昭・（孝文）・厳襄の五王、皆大に丘隴を作り、多基^{えいぞう}に瘞藏^{ことごとく}す。咸 発掘され暴露尽くされるは、甚悲しむに足る。）

とも書かれ、恵文王・武王の墓には墳丘があったと記載されている。永陵・公陵は考古学的に確認できる中原最古の墳丘墓の可能性はある。しかし、湖北省孝感市雲夢県睡虎地の秦時代の M11 号墓出土の竹簡、『雲夢睡虎地秦墓』⁽⁸⁾（1981 年）の竹簡 No.560 には、

可（何）謂旬人、旬人守孝公獻公冢者也

（何を旬人と謂うか、旬人とは孝公獻公の冢を守る者也）

とあり、焦南峰氏は「冢」を墳丘のある墓である可能性があると述べる。⁽⁹⁾冢が墳丘墓ならば、獻公の没年は前 362 年で、前 4 世紀前半には墳丘墓が出現していたことになる。

『史記』秦始皇本紀に、

昭襄王享國五十六年、葬芷陽。生孝文王。孝文王享國一年、葬壽陵。生莊

『水経注』の記載には興味深いものがある。⁽⁵⁾それとは別に M45 号墓採集の「橐泉宮當」瓦當は、『漢書』劉向傳の記載に合う建物名の遺物で、秦公 1 号墓墓上での柱穴や排水管・瓦類の発見を参考に考えると全長約 243m の 3 墓室を有する丰字形の M45 号墓は、墓上建築を有する秦第 9 代穆公の墓である可能性がたかい。

(3) 戦国時代秦の王陵

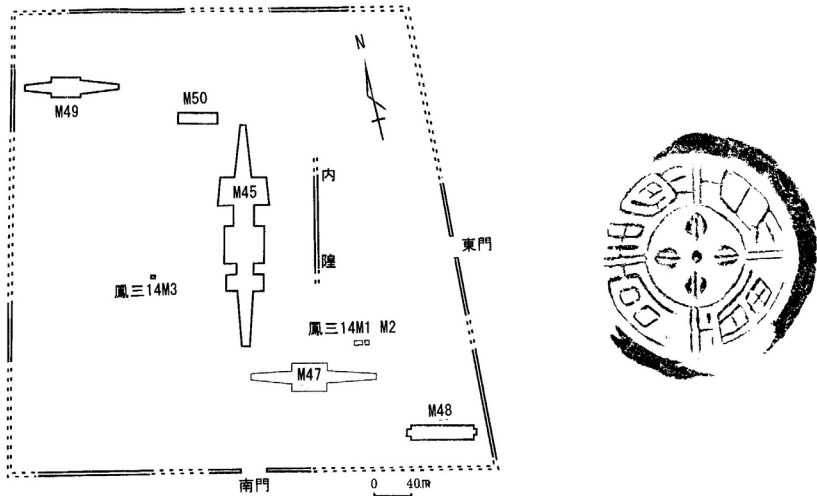
『史記』秦始皇本紀に、

惠文王享国二十七年、葬公陵。「正義」括地志云秦惠文王陵在雍州咸陽縣西北一十四里。

生悼武王悼武王享国四年、葬永陵。「正義」括地志云秦悼武王陵在雍州咸陽縣西北十里、俗名周武王陵非也。

(惠文王国を^{うくる}享こと二十七年、公陵に葬る。「正義」括地志に云う、秦惠文王陵は雍州咸陽縣西北一十四里に在り。

悼武王を生む。悼武王国を^{うくる}享こと四年、永陵に葬る。「正義」括地志云う、秦悼武王陵雍州咸陽縣西北十里に在り、俗に周武王陵と名づく、非なり。)とあるが、陝西省咸陽市渭城区周陵鎮に清畢沅の周文王陵碑と武王陵碑を有する 2 基の方形墳丘墓の周陵が存在する (第 15 図)。中国側のボーリング調査の結果、周陵の地下には南北に並ぶ亜字型墓とそれを取り巻く秦陵の地割を持つ墓域を形成する環壕の存在が明らかになっている。⁽⁶⁾この南墓は南北長約 250m あり、秦第 27 代武王の永陵である可能性がある。なお、永陵の東南約 3.8km にある延陵(漢成帝陵)の東辺にある 2 基の墳丘と南北の亜字型墓は秦第 26 代惠文王の公陵との推定がある。また逆に周文王陵を公陵、延陵東北の亜字型墓を永陵とする考えもある。⁽⁷⁾いずれにしろ、何れかが秦公陵で、何れかが秦永陵である。雍城南西の秦公陵园の秦墓には墳丘は存在しない。しかし、永陵・公陵においては亜字型墓の墓室と墳丘が相似的に重なり、現存する墳丘を戦国時代の遺構と考えざる負えない。『漢書』卷三十六、劉向伝には、



第14図 14号秦公陵园 M45号墓、橐泉宮瓦當

秦穆公冢在橐泉宮祈年觀下。

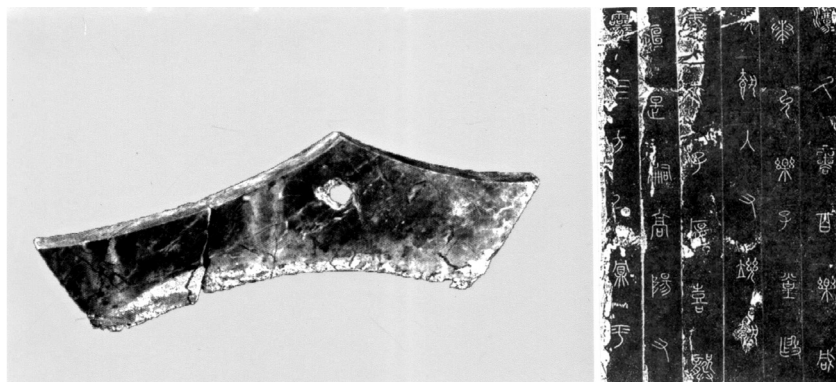
(秦穆公の冢は橐泉宮祈年觀の下に在り。)

とあって、『三輔黄図』にも『皇覧』を引いて同じ記載があり、『水経注』渭水注には、

雍水…南流逕胡城東、俗名也、蓋秦惠公之故居、所謂祈年宮也、孝公又謂之橐泉宮、按、地理志曰、在雍、崔駰曰、穆公冢在橐泉宮祈年觀下、皇覧亦言、是矣。…余謂、崔駰及皇覧、繆志也、惠公孝公並是穆公之後、繼世之君矣。子孫無由起宮于祖宗之墳陵矣、以是推之、知二證之非實也。

(雍水…南流して胡城の東を逕る、俗名なり、蓋し秦惠公の故居なり、所謂祈年宮なり、孝公又橐泉宮と謂う。按ずるに、地理志に曰く、雍に在り、崔駰曰く、穆公冢は橐泉宮祈年觀の下に在り、皇覧亦言う、是なり。…余謂く、崔駰および皇覧、^{あやまり}繆志なり、惠公孝公いずれも是れ穆公の後なり、繼世の君なり。子孫祖宗の墳陵に宮を建て^{よし}る由無し、以て是を推すると、二證の非實を知るなり。)

とあるが、鳳翔県長青鎮での橐泉宮瓦當や祈年宮瓦當の発見を知ると酈道元の



第13図 石磬・銘文 秦公1号墓出土

…天子宴喜、共桓是嗣。高陽有靈、四方以甯平…。…惟四年八月初吉甲申…。

(…天子宴を喜び、共桓是を嗣ぐ。高陽に靈あり…。)(…惟四年八月初吉甲申…。)

と、秦第13代景公の祖父共公、父桓公の名と、これとは別に「惟四年」の前573年があり、従って被葬者を春秋時代後期の第13代景公とするのが定説である。

雍城14号秦公陵园は、東西南北を約450mの環壕に囲まれ、その中に5基の墓が存在するが、その中心に位置するM45号墓は、3墓室を有する南北に長い丰字形墓で全長約243mある(第14図)。墓室位置の堆積層からは槽形板瓦・丸瓦など墓上建築の廃材堆積が確認され、さらに「橐泉宮當^{たくせんぐう}」瓦當が採集されている。先の秦公1号墓には大型墓上建築址が存在していた事から、秦M45号墓にも墓上建物が存在していた可能性が考えられる。

『漢書』卷三十六、劉向伝には、

秦穆公葬於雍橐泉宮祈年館下、橐里子葬於武庫、皆無丘隴之處。

(秦穆公は雍橐泉宮祈年館の下に葬られる。橐^{ちよ}里子は武庫に葬られる。皆丘隴の無き處。)

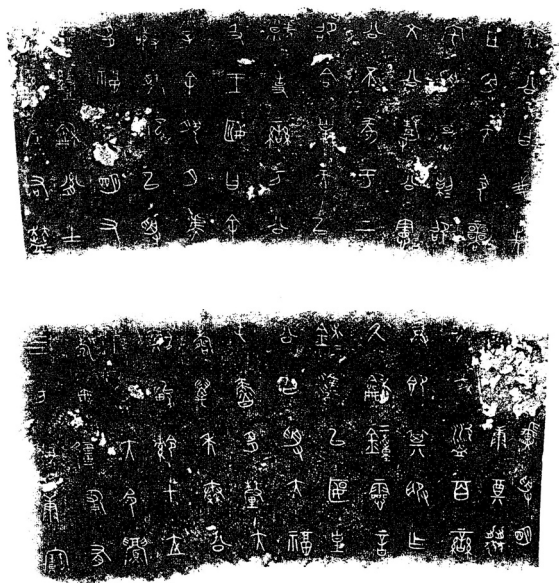
と見られ、橐泉宮・祈年宮については『皇覽』にも、

襄公が最初で荘公ではあり得ない。また楊家溝太公廟村出土の鐃の銘文による「我先祖、受天命賞宅受國」の「我先祖」は襄公で、この銘からも初めての秦公は襄公である。M3号墓の被葬者を秦文公とする説も存在するが、大堡子山出土の秦公鼎・秦公簋は林巳奈夫教授の青銅器編年の西周ⅢB・春秋Ⅰで、文公の時代の遺物ではない。まして寧公や武公時代の青銅器ではない。

秦雍城は、陝西省鳳翔県の南、雍水の北岸に位置し、秦徳公元（前 677）年に始まり、獻公二（前 383）年に到る秦都であった。これまでのボーリング調査で雍城遺跡の南に環濠に囲まれた 10 個所以上の秦公陵園が検出され、また 49 基の大墓の存在が確認されている。秦公 1 号墓は、中字型墓、墓室長さ 59.4m、幅 38.45m、深さ 24m、墓道を含む全長は 300m で、墓室は主槨室、副槨室、箱殉 72 個等から構成されていた（第 12 図⁽³⁾）。墓上からは、柱穴や排水管・瓦の発見も在り、墓壙の上に墓上建築が造営されていたと考えられている。出土した石磬の銘文に（第 13 図）、



第 12 図 秦公 1 号墓 陝西省鳳翔県



第 11 図 1 号秦公鎔銘文

秦公曰我先祖、受
天命賞宅受國。烈
烈昭文公・靜公・憲公
不墜于上、昭合皇
天、以號事蠻方。
…

(秦公曰く、我先
祖天命を受け、宅
を賞け國を受く。
烈烈として、昭な
る文公・靜公・憲
公上より墜ちず。
昭らかに皇天に合
い、以て號^{つし}んで蠻
方を事とせん。

…)

とあり、最初の秦公は 5 代武公、我先祖は 1 代襄公で、つづいて 2 代文公・靜公・寧公と、襄公に始まる歴代の秦公の名が記載されている。秦公として襄公の父である莊公の名は出てこない。莊公は後に秦の歴史の上で秦莊に贈った諡と思われ、最初の秦侯は襄公である。この太公廟村の鎔の銘文からも大堡子山 M1 号墓の被葬者は、襄公で莊公ではありえない。

西周末・春秋時期の国君の墓地においては、山西省曲沃県晋侯墓地などにおいて夫婦の墓が並列して造営されている例が見られる。大堡子山 M3 号墓・M2 号墓もその例にならうと解釈したい。墓の考古学的年代、地理的位置から、さらに正式に秦公を名乗るのは第 1 代襄公からである事から、M3 号墓の墓主は襄公、M2 号墓の墓主は襄公妃である可能性が極めて高い。

以上の理由から大堡子山の規模の大きい M3 号墓の墓主は秦襄公、規模の小さい M2 号墓の墓主は襄公妃と結論づけた。大堡子山 M3 号墓の被葬者に関して、秦莊公とする説があるが、大堡子山から出土した秦公鼎・秦公簋の秦公は

(第9図)に、

秦子作寶𨮒鐘以其三𨮒、乃
音𨮒𨮒𨮒秦子峻齡在位、
眉寿萬年無疆。

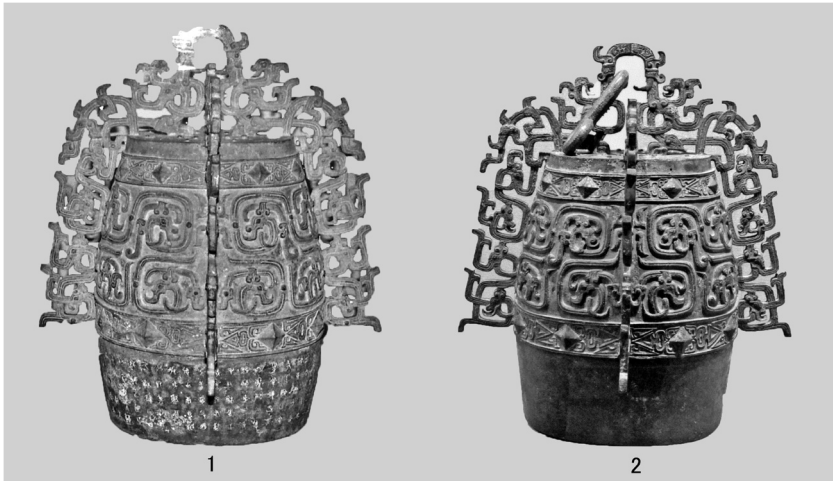
(秦子寶𨮒の鐘を作る、以
て其の三𨮒、乃ち音𨮒𨮒𨮒
𨮒、秦子峻齡在位し、眉寿
萬年無疆。)

とある「秦子」は襄公の子の文
公の可能性があり、父が受けた
諸侯の身分を長く受け継ぐこと
を願っている。M3号墓の父襄
公とM2号墓の母襄公妃の墓前
で祭祀を行い秦公の子つまり「秦子」と名乗ったと解釈される。

1978年に陝西省宝鸡市楊家溝太公廟村で発見された秦公𨮒には(第10・11
(2)
図)、



第9図 秦子𨮒銘文 礼県博物館



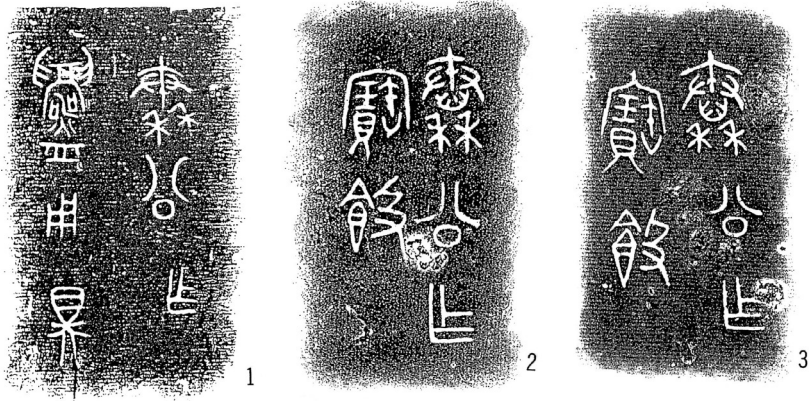
第10図 秦公𨮒 宝鸡市楊家溝太公廟村 1. 2号𨮒、2. 3号𨮒



第7図 大堡子山 K5 祭祀坑発掘地点



第8図 青銅鐃 大堡子山 K5 祭祀坑 1. K5 : 1-1 号鐃 (秦子鐃)、2. K5 : 3-1 号鐃、3. K5 : 5-1 号鐃



第6図 秦公鼎・簋銘文 1. 秦公鼎、2. 秦公簋甲、3. 秦公簋乙、上海博物館蔵

漾水には、

西漢水又西南、合楊廉川水、水出西谷、衆川瀉流、合成一川。東南流、逕西縣故城北。秦莊公伐西戎、破之。周宣王與其先大駱犬邱之地。為西垂大夫、亦西垂宮也。

(西漢水又西南す、楊廉川水に合す、水は西谷に出る、衆川は瀉流す、一川に合成す。東南に流れ、西縣故城北を逕る。秦莊公西戎を伐ち、之を破る。周宣王其先大駱犬邱之地を與える。西垂大夫と為す。また西垂宮なり。)

と書かれ、先の『史記』秦本紀の「召莊公…為西垂大夫」の正義には、
括地志云秦州上邽縣西南九十里、漢隴西西縣是也。

(括地志に云う、秦州上邽縣の西南九十里、漢の隴西の西縣これ也。)
と、西垂の説明がある。これらにより、西垂は漢代の隴西郡西縣に当たると考えられ、今の礼県付近で、大堡子山の位置は西漢水の北に位置し、『水経注』漾水の西垂の地に一致する。

M2号墓の南西の楽器坑で発掘された秦子鐃を含む3点の鐃(第7・8図)は、型式的に先の秦公簋や秦公鼎の次の時代の遺物で、秦子鐃の鼓部分の銘文

に当てはめられ、これら鼎や簋は型式的に西周末・春秋初頭の遺物である（第4・5図）。秦公鼎と秦公簋の銘に、

「青銅鼎」秦公作鑄用鼎。「青銅簋器身・蓋」秦公作寶簋。

（「青銅鼎」秦公用鼎を作鑄す。「青銅簋器身・蓋」秦公寶簋を作る。）

の銘文が鑄込まれ「秦公」銘がある（第6図）。秦襄公は西周時代にはまだ西垂の大夫で、莊公の死後7年を経て先の「襄公以兵送周平王…秦能攻逐戎」の功績により、初めて諸侯となり、時代は春秋時代に入り「秦公」となる。正式に秦公を名乗るのは第1代襄公からである。これらの秦公鼎と秦公簋の西周末・春秋初頭の年代は、まさに襄公の時代に当たる。

『史記』秦始皇本紀の記載に、

襄公立享國十二年、初為西峙。
葬西垂。

（襄公立ち國を享ること十二年、初て西峙を為る。西垂に葬る。）

と伝えられるが、この西垂は『水經注』漾水および『括地志』秦州の西垂である。西垂に関して『水經注』

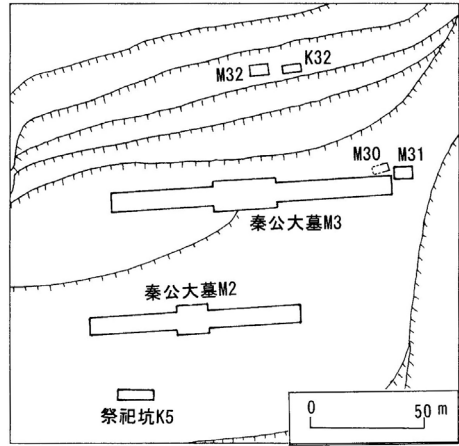


第4図 秦公鼎 上海博物館蔵



第5図 秦公簋 上海博物館蔵

掘された(第2・3図)⁽¹⁾。南側のM2号墓は全長88m、北側のM3号墓は全長115mであった。いずれの大墓も墓室の二層台上に殉死者が置かれ、犬を殉葬した腰坑が設けられていた。大堡子山大型墓から出土したと推定される秦公鼎や秦公簋が上海博物館に収蔵されたが、その青銅鼎や簋には竊曲紋が施され、この秦公鼎と秦公簋の器形と紋様は、林巳奈夫教授の青銅器編年の西周ⅢBから春秋Ⅰ



第2図 秦公大墓 M3・M2号墓、祭祀坑K5位置図 大堡子山遺跡



第3図 大堡子山遺跡 中央立看板・M3号墓発掘地点、後方草地・M2号墓発掘地点、右後方ドーム・祭祀坑K5

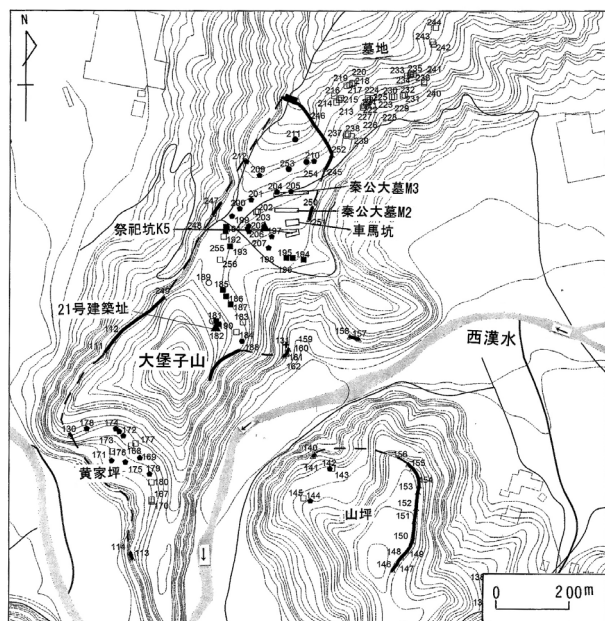
秦襄公将兵救周、戦甚力有功。周避犬戎難、東徙雒邑。襄公以兵送周平王、平王封襄公為諸侯、賜之岐以西之地。曰、戎無道侵奪我岐豐之地、秦能攻逐戎、即有其地、與誓封爵之、襄公於是始国。

(周の宣王位に即き、乃ち秦仲を以て大夫と為し、西戎を誅す。西戎、秦仲を殺す。…周宣王乃ち莊公の昆弟五人を召し、兵七千人を與え、西戎を伐たしむ。之を破る。是に於て復た秦仲の後及び其先大駱の地犬丘を予え、之を并有せしめ、西垂の大夫と為す。…西戎、犬戎、申侯と興に周を伐ち、幽王を驪山の下に殺す。而うして秦の襄公、兵をひきいて周を救ひ、戦^{はなはだ}甚つとめて功有り。周、犬戎の難を避けて、東のかた雒邑に徙る。襄公、兵を以て周の平王を送る。平王、襄公を封じて諸侯と為し、之に岐より以西の地を賜い、曰く、戎無道にして我岐豐の地を侵し奪えり、秦能く戎を攻めて逐^おへり、即ち其地をたもとと^{とも}。與に誓いて之を封爵す、

襄公是において始めて国す。)

と秦建国の歴史が書かれている。

甘肅省礼県永興郷と永坪郷の境界、西漢水北岸に位置している大堡子山遺跡では1993年頃に大規模な盗掘があり(第1図)、その後1994年に発掘が行われ2基の中字型墓と祭祀坑(樂器坑)等が発



第1図 大堡子山遺跡遺構分布図

□墓、○馬坑、▲灰坑、■版築、●路土

春秋戦国時代秦王陵の被葬者と変遷

飯 島 武 次

(1) はじめに

筆者は、中国側が行う甘肅省・陝西省内の西周時代併存期の秦人遺跡および春秋戦国時代秦文化遺跡の調査に参加させてもらい、春秋戦国時代の秦国大型墓の踏査を行ってきた。その結果から、春秋戦国時代秦王陵の大堡子山遺跡 M3 号墓・M2 号墓、雍城 14 号秦公陵园 M45 号墓、周文王陵・武王陵の被葬者に関して、諸説在る中で筆者の見解を述べ、あわせて春秋戦国時代秦王陵の基本的な造営様式の変遷を述べる。

(2) 秦国の成立と春秋時代秦の王陵

『史記』秦本紀には、

周宣王即位、乃以秦仲為大夫、誅西戎。西戎殺秦仲。……周宣王乃召莊公昆弟五人、與兵七千人、使伐西戎。破之。於是復予秦仲後及其先大駱地犬丘、并有之、為西垂大夫。……西戎、犬戎與申侯伐周、殺幽王驪山下。而